

金城学院大短大 康珠美, 元静岡県立大井川高 丈石美晴, 名古屋文理短大
 鈴木真由子, 椋山女学園大 守谷敏子, 大阪市立大学〇古寺若
 静岡工学教育 菅原亜子, 村尾勇之

目的 本研究の目的は、第1報以来述べてきたように、アメリカ家政学会誌に報告された研究論文の内容が、歴史的にどのように推移してきたかを分析することによって、アメリカ家政学会の特質と研究動向を明らかにしようとするものである。前年度の報告では、分析対象論文の特定と、それに基づく年代別・領域別比較分析が試みられ、研究内容の系譜の概観を捉えた。本報では、第3, 4報に引き続いて、特に「食物学」領域に注目し、時系列的に、量・質の面から分析を行うことにより、「食物学」領域の研究動向を概観することを目的とした。

方法 本報で分析に用いた資料、ならびに、分析方法は、前報と同様であり、分析の過程は、以下に示す通りである。①年代別・4つの中分類領域別論文数の把握から、「食物学」領域の研究動向を量的に捉えた。②各年代別の中分類領域別論文数を指数化することによって、研究動向の時系列的変化を明らかにした。③年代別・中分類領域別の構成比を比較することによって、相互関係および、研究の質的動向を把握した。さらに、構成比から、レーダーチャートを作成し、パターン類似率を算定することによって、各中分類領域の時系列動向を、相対的・総合的に捉えるとともに、群内平均法によるクラスター分析を行うことによって、年代別研究動向の類似性を明らかにした。

結果 「食物学」領域全体としては、40年代を除いて、明らかに論文数の減少傾向がみられる。「食生活・その他」の割合が、近年増加しており、全体の約63%を占め、「食物学」領域での研究動向を特徴づける傾向であるといえる。